2022年5月15日 川越教会

丸山　勉

危機の時にこそ

［使徒言行録22章30～23章11節]

翌日、千人隊長は、なぜパウロがユダヤ人から訴えられているのか、確かなことを知りたいと思い、彼の鎖を外した。そして、祭司長たちと最高法院全体の召集を命じ、パウロを連れ出して彼らの前に立たせた。そこで、パウロは最高法院の議員たちを見つめて言った。「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました。」すると、大祭司アナニアは、パウロの近くに立っていた者たちに、彼の口を打つように命じた。パウロは大祭司に向かって言った。「白く塗った壁よ、神があなたをお打ちになる。あなたは、律法に従ってわたしを裁くためにそこに座っていながら、律法に背いて、わたしを打て、と命令するのですか。」近くに立っていた者たちが、「神の大祭司をののしる気か」と言った。パウロは言った。「兄弟たち、その人が大祭司だとは知りませんでした。確かに『あなたの民の指導者を悪く言うな』と書かれています。」パウロは、議員の一部がサドカイ派、一部がファリサイ派であることを知って、議場で声を高めて言った。「兄弟たち、わたしは生まれながらのファリサイ派です。死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判にかけられているのです。」パウロがこう言ったので、ファリサイ派とサドカイ派との間に論争が生じ、最高法院は分裂した。サドカイ派は復活も天使も霊もないと言い、ファリサイ派はこのいずれをも認めているからである。そこで、騒ぎは大きくなった。ファリサイ派の数人の律法学者が立ち上がって激しく論じ、「この人には何の悪い点も見いだせない。霊か天使かが彼に話しかけたのだろうか」と言った。こうして、論争が激しくなったので、千人隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと心配し、兵士たちに、下りていって人々の中からパウロを力ずくで助け出し、兵営に連れて行くように命じた。その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない。」

[１]　パウロの危機

今日の聖書の箇所は、紀元1世紀、あの地中海地域でキリストの福音を精力的に宣べ伝えた伝道者パウロが、大きな危機に直面させられている場面です。「使徒言行録」は全部で28章ありますが、もうその最後の方です。海を渡っての宣教の旅を終えて、今彼は、エルサレムにいます。パウロはユダヤ人ですから、自分の故国に戻ってきたのです。21章17節を見ると、教会の兄弟たちは喜んでパウロを迎えたと書いてあります。そして皆はパウロの報告を聞きました。それは、パウロの宣教を通して、多くの異邦人たちが福音を信じたということです。そして兄弟たちは神様を讃美したと書かれています。ここまでは良かったのです。しかしまだ心が閉ざされているユダヤ人たちは、このパウロという人物は、神様がユダヤ人と結んだ契約を無視し、神はお一人しかいないし、目に見えるお方ではないのに、イエスという男を神の独り子メシアであると言いふらすとんでもない男だ、ユダヤ教の破壊者だとして、過激にも彼を捕えて殺そうとしたのです。21:31には「彼らがパウロを殺そうとしていたとき」とあります。

[２]　「計算」をしない生き方

けれども、少し話を端折りますが、実はパウロは、ローマの市民権を持っていたということが判明します。その事実から、このローマ帝国支配下のユダヤでパウロが殺されるということになれば、ローマ帝国の権力者たちにとって大きな汚点になります。ですから今日の所では「千人隊長」という人（23:26にはその名がクラウディウス・リシアであると書かれています）が、ユダヤ人たちの鼻息が荒く収拾がつかなくなっている事態をいったん収めるように仕向けるのです。

22:24にはこうあります。「千人隊長はパウロを兵営に入れるように命じ、人々がどうしてこれほどパウロに対してわめき立てるのかを知るため、鞭で打ちたたいて調べるようにと言った」。これは千人隊長の極めて政治的な行いですね。まぁ、ある意味パウロの事はどうでも良いのです。暴動を鎮めるためにはどうするのが賢明か、自分の立場も守られるか、そのような「計算」をするのです。権力者というのはそうなり易いのでしょうか。あのピラトもそうでしたよね。しかし、そういう「計算」とは全く違う所で生きていた人が正にパウロではないかと思います。23:1にこうあります。パウロの言葉です。「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました。」これは、千人隊長に召集されたユダヤの祭司長たちや議員たちを目の前にして語った言葉です。私はこの「良心に従って神の前に生きてきた」という言葉は、本当に自由にされた者の言葉だと思いました。そこには駆け引きとか「計算」がないのです。本当に恐るべきものを知っているから、恐れる必要がない者に対しては決然とした態度を持つことが出来るのだと思います。初めの「兄弟たち」という呼びかけの言葉もいいですね！ここには同胞に対する愛があります。この同胞に対するパウロの祈りがあったからこその言葉ではないでしょうか。これが、キリスト者なのだなと思いました。

[３] 信仰者の存在意義

さて、今日読んで頂いたところですが、今パウロは、大祭司と（つまりユダヤの宗教上の最高権力者と）議員たち（これもユダヤ教の律法を遵守する人々です）を目の前にして、たった独りで立たされている構図です。私はイエス様の言葉を思い起こしました。それはマタイによる福音書10章にある、弟子たちを派遣される際に語られたこのような言葉です。―「わたしはあなたがたを遣わす。それは狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」（マタイ10:16）。あなたがたを遣わすのは、狼の群れに羊を送るようなことだ、と主イエスはおっしゃるのです。この時弟子たちはどう思ったでしょうね。そして今パウロは、独りで、目に見えない大きな狼の前に立たされていると言えます。―その狼とは何でしょうか。ユダヤ教でしょうか？そうとも言えるかもしれませんが、恐ろしい獣は、もっと掘り下げていえば「変わろうとしない人間の心・頑なさ」ではないでしょうか。単にユダヤ教の問題ではありません。

私たちもそうなのです。私たちはもしかしたら、‟信仰を持っている”と言いながら、そういう信仰心のある自分自身を信じている、ということがあるのではないかと思うのです。いつの間にか神様を私の人生の材料にしてしまうということ。けれども信仰というのは、何か掟を守っていればそれで立派な信仰者なのかと言えばそうではない。イエス様は、何よりも当時の律法学者やファリサイ派の者たちをあなたがたは偽善者だと鋭く語りました。厳しい言葉です。そして注目したいのはこのパウロです。彼は先ほども申しましたが、本当に自由な者とされた人です。主イエスが彼を捕えて下さったからです！かつての律法主義の生き方には本当の平安がなく、むしろクリスチャンたちを迫害していた、それこそ、彼は‟狼”だったのですから。そこ彼が、今、一匹の‟羊”です。或る意味、弱い羊です。そしてそれでいいのです。それがクリスチャンです。頭の中で政治的な計算をして何とか自己保身を図ろうとする、そんなことで人生を費やさなくてもいい！どうしてかと言えば、私たち羊には、まことの羊飼いが共にいて下さるからです！

パウロがなぜ訴えらえているのか千人隊長は分からなかったと22:30に書いてありました。パウロは23:6でそのことについて公に語っているのですね。「パウロは…議場で声を高めて言った。「兄弟たち、わたしは生まれながらのファリサイ派です。死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判にかけられているのです。」　「死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判にかけられているのです。」と。これ、私は読んでワクワクしてしまいました。彼は、この危機の中で福音の最終的勝利である復活信仰について自然に語っているのです。決して無理をして語っているのではなく。これは彼の証しなのです。彼が今なぜここで捉えられているのか、その理由はキリストの「福音」に生きているからなのです！救いの喜びが彼をそのように押し出しているからなのです。つまり、彼の存在意義はそこにあるのだということが、この危機的な状況の中で明らかにされているのです。彼は色々な場所に出向いて伝道しましたが、今は動けない「捕らわれ人」として、主を示しているのです。普段は隠されているキリスト者の内実、正体がここで光を放っていると言っても良いのではないでしょうか！主イエスが私を捕らえ、あの十字架で赦し、私を復活の命の希望の中に生かしてくれているのだ！さぁ、あなたも頑なさの中に安住しないで、あなたを招く主イエスの声を聞いて欲しい！私はあなたがたにも救いを語るため、今捕えられているのだと、パウロのこの時の存在そのものが雄弁に語ってくれているのです。

しかし、パウロもまた弱い人間でした。彼の生れつきの力で伝道した訳ではありません。神様、主イエス様が、折々にみ声をかけて励まして下さった。23章11節にはこうあります。「その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない。」 彼はこの声を個人的に聞いたのでしょう。そこが大切ですね。誰も立ち入れない心の深い所に主が入って来て下さって、時に赦し、時に力づけて下さる。まことの羊飼いとして責任をもって導いて下さる。「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない」と。この「なければなならい」というギリシア語は、単に命令ではなく、神様ご自身がそのように整えて下さる、という神様の必然・お約束の言葉です。事実、この後彼は「囚人」となってローマまで運ばれ、そこでの宣教の道が開かれるのですね。不思議なことです。私たちも、皆、同じように神様によって捕らえらえた者たちです。ですから、私たちの存在そのものが証しです。それは、危機の時にこそ、神様のお約束の力が輝き、私たちを支え、導くのだと思います。パウロを生かしたのと同じ主が、私たちを生かしているのですね。そして聖霊がいつも共にある。この主に寄り頼んで、安心して生きて行きましょう。お祈り致します。

神様、キリスト者とは、祈る者であるということを教えられます。一人でも多くの者が神様の招きを聞き、立ち帰り、本当の平安を得ること、これを祈ること、それが私の幸いと言わせて頂ける。そのような「神共にいます人生」を与えられていることを感謝致します。弱い私たちです。愚かで頑ななで、近視眼な者です。ですから、まことの羊飼い主イエスよ、私たちを常に導いて下さり、あなたのみ言葉に素直に従わせて下さい。私たちの人生の最期にも復活の命の約束が続いていることを信じ、更にその希望をこの存在を通しても宣べ伝えさせて下さい。イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。